

42006

教科書文庫

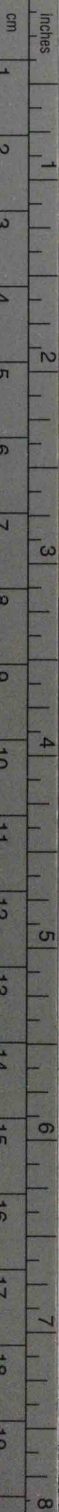
4
810
41-1909
200030
2235

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

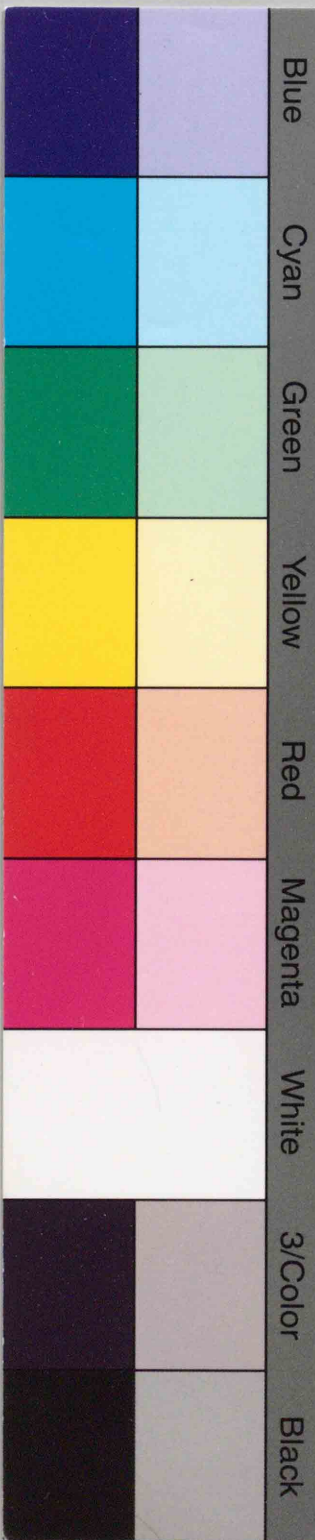


© Kodak, 2007 TM: Kodak



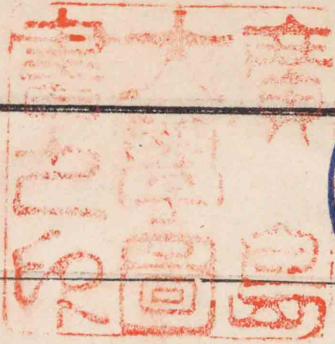
Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Dc8
資料室





新訂中等國語讀本卷四目次

- 一、 讀書の樂……………一
- 二、 わが幼時……………三
- 三、 端艇につきて友人に贈る（書翰）……………一一
- 四、 おのれを屈せよ……………一六
- 五、 レッシニングの比喻譚……………二〇
- 六、 畫家の苦心……………二三
- 七、 濠洲航路……………二八

新訂中等國語讀本卷四目次

一

375.9
008

教育部定檢濟 中學教科書 明治四十二年 二月一日

落合直文編

森林太郎補
萩野由之補

新訂中等國語讀本

東京 明治書院

八、山巔の題名……………三六

九、騎馬旅行（新體詩）……………四一

一〇、曆法……………四三

一一、日本海の大戦 その一……………四七

一二、日本海の大戦 その二……………五四

一三、今上天皇御製（短歌）……………六〇

一四、赤十字社……………六一

一五、アレクサンドル大王の逸事……………六六

 その一……………六八

 その二……………七一

 その三……………七三

一六、見料……………七五

一七、高價の笛……………七七

一八、一燈錢（書翰）……………八四

一九、春の巴里……………八八

二〇、農業の快樂……………九四

二一、地殻の變動……………九七

二二、ナイアガラの瀑……………一〇二

二三、車窓偶感……………一〇八

二四、奮鬪（格言）……………一一三

二五、 山紫水明……………二二四

二六、 高山彦九郎……………二一九

二七、 蘇武（新體詩）……………一二六

二八、 わが家の富……………一三三

卷四目次終



新訂中等國語讀本卷四

一、 讀書の樂

四時につきて、いつをも分かず樂しきは、書見る樂なり。春夏は、日の長きにつけ、秋冬は、夜の長きにつけて、その樂、盡くる時なし。

この樂は、いかなる富貴の樂にも換へ難きものなり。ことに、經傳を讀めば、そのたび毎に、まのあたり、聖賢の教を聞くが如きこと、ちせられて、その尊さ、いふ

經傳
まのあたり

名教

べくもあらず。狄仁傑が「名教のうち、かぎりなき樂あり。何ぞ、俗人と語る要あらん」といへるは、誠にさることと覺ゆ。

古語にいはく、「一日讀書すれば、一日の益あり。一卷讀書すれば、一卷の益あり」と。又、いはく、「人の智を増すものは、書に若くことなし」と。歐陽修は、また、「天下の樂、終日、書案にあり」といへり。嗚呼、智を増して、しかも、その間に、大なる樂を受くることを得るなど、天下、また、かゝる有益なるものあらんや。さるを、世には、この樂の、かくの如く大なるを知らざるもの多し。をしむべ

書案

きなり。

これを、物に誓ふれば、我が國に生まれて、富士の雪、吉野の花を見ざるが如し。いかにもくち惜しきことならずや。まして、人と生まれて、人の道を知らず、古今の事、萬物の理に暗からんは、その憾、何ぞ、啻に、富士、吉野を見ざるのみならんや。誰も誰も向はまほしきは、讀書の樂なり。(貝原篤信―樂訓)

二、わが幼時

わが幼き頃、上野物語といふ草紙ありけり。これは、

透寫

寬永寺の花見に、人の群れ来る事どもを記せるなり。
 わが三歳の春の頃、火燵に、足をさして、腹這ひ居て、そ
 の草紙を見ながら、筆紙を求めて、透寫しけるを、母人
 の見給ひて、十の中、一二は、まことの文字もありけれ
 ば、わが父に見せ參らせられしを、父の友人の來り見
 しより、人々も聞き傳へて、その寫しし物どもを取り
 傳ふる事となりたりき。

師友
往來物

その後、常の戲に、筆執りて、物書く事のみをしけ
 れば、おのづから、日々に、文字をも見知りたれど、物讀
 む師友とすべき人なかりしかば、只、往來物の類など

わが師友の書は、
 まねおとすべし、
 せつせつと、
 進くと、母の書、
 知らぬ前書、
 漸く、
 なる、
 なる、
 なる、
 なる、

新訂中等國語讀本

新訂中等國語讀本



を讀み習ふのみなりき。戸部の
 家人に、富田とて、生國は、加賀の
 國の人と聞えしが、太平記評判
 といふ書を傳へて、その事を講
 ずるあり。夜々に、わが父など寄
 り合ひつゝ、それを聽聞せられ
 しが、わが四五歳の時、つねに、そ
 の座に侍りけるに、夜、いたく更
 けぬれど、終に、座を起ちしこと
 もなく、講畢りぬれば、その義を

奇特
奇(奇)

請ひ問ふことなどもありしを、人々、奇特のことなりといひあへりき。

誦を成す

六歳の夏の頃、上松といふ人の、少しは、文字などありけるが、七言絶句の詩三首まで教へて、その意を解き聞かせられつるに、やがて、誦を成して、そを、人にも吟じ聞かせたりき。この兒、才あり。いかにも、師を擇びて、學ばしめらるべしなど、かの人もいひしかど、頑なる昔人等のいひしは、昔より、利根、氣根、黄金の三こん無くては、學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそ生まれ付きたらめ、猶幼くして、その氣根の程も測

頑なり

學匠

いつくしみ

り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事も心得られずなどいひあへりしに、わが父も「戸部の御いつくしみ深く、常に、御側を離し給はねば、學に入れ、師に従はしめん事も協ふべからず。されど、彼の、幼きより、物書く事をば、人々に語り誇らせ給へることなれば、せめては、物書き習ふことのみは、せさせたきものなり」とて、わが八歳の秋、戸部の、上總の國に行き給ひし後に、手習ふことを教へられたり。その冬の十二月に、戸部歸り給ひしかば、常に、傍に侍ふこともとの如く、明年の秋、復、國に行き給ひし後にて、課を立てられて、「日の

課を立つ

縁

中には行草の字三千字、夜に入りて、一千字を限りて、書きいだすべし」と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課、いまだ満たざるに、日暮れんとするごと度々にて、西向なる竹縁の上に、机を持ち出でて、書き終へぬることもあり。又、夜に入りて手習ふに、睡の催して、堪へ難きに、我に附けられたる者と、ひそかにばかりて、水二桶づつ、かの竹縁に汲み置き、いたく、睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄てて、まづ、一桶の水をかぶりて習ふに、一時は、その冷なるに目覺むること、ちすれど、しばし、程經ぬれば、身暖になりて、またも睡くなり

ぬ。また、水をかぶること、前の如くして、二たび、水をかぶりぬる程には、大やうは、課をも充てたりき。これ、わが九歳の秋冬の閒のことなり。

かたの如し

かゝりし程に、この頃よりは、わが父の、人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたりき。十一歳の秋、また、課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の内に淨寫して、參らすべし」と命ぜられ、命ぜられし如くに、事を終へつれば、冊になして、戸部に見せ參らするに、褒め給ふこと大方ならざりき。十三の時よりは、戸部の、人と贈答し給ふほどの文ど

淨寫

も、大方は、われに命ぜられき。

又、十一歳の時に、わが父の友なる關某の子は、太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、われにもこの技教へられんことを望みしに、「わぬし、いまだ幼し。是等の技學ばんこと早かり」といふ。さこそは侍るべけれど、太刀使ふこと、少しも心得ざらんには、刀脇差、腰にせんこと、誠に不用のことにや」といひしかば、「そのいふところ、誠にことわりなり」とて、一つの技を傳へて、習はしめられたり。

ことわり

かゝりし程に、その年、十六になれる者の、われと、藝

心に染む

を試みんといひしかば、木刀を取りて、三度合ひて、三度まで勝つことを得たりき。その後は、常に、かゝる武藝の事どもを好みて、手習ふことなど、心にも染めずありしかど、物讀む事は好みければ、わが國の物語、草紙等の類をば、殆ど見つくせり。(新井君美―折燒柴の記)

三、端艇につきて友人に贈る

ひさしく、御近狀を詳にせざるが、御起居いかゞ。山も、水も清きあたりに遊びくらされて、平生御自慢の水練術を、湘南の荒磯波に試みらるゝ、愉

荒磯波

快、さこそと存じ上げ候。

こちらにては、暑さ、日に増しはげしくて、日中な
どは、殆ど堪へがたきほどに候。散歩もならねば、
書見もなり難く、せめては、水邊の涼しきあたり
へと存じて、四五日前より、東京に残れる諸友を
催し集めて、日毎に、隅田川に参り、例のボート漕
習を試み居り候。はじめのほどは、君達の留守中
に、一かどの勉強をなして、來春のレース場には、
人目を驚しくれんなどの野心もなきには候は
ざりしかど、射るが如き日光の暑さに堪へかね

野心

て、折々は、岸頭の楊柳に、舟を繋ぎ、洲邊の蘆荻に、
櫂をとむるなど、遊行の方にのみ傾きゆきて、
漕習のことは、いつか、全く忘れ果て候。かくて、不
思議にも、僕等は、こゝに、今まで、嘗て知らざりし、
一種の樂を見いだして候。隅田川といへば、直に、
ボートを思ひ、ボートといへば、レースより外な
き様にのみ思ひ居りし僕等は、レース以外、樂の、
更に大なるものあるを覺えて、今は、なかなかに
棄て難くなり候。そは、水の樂にて候。このことを
ある日、某先生をおとづれし時、ふと、このことを

改良

いひ出でたるに、先生には、君等は、よく、そこに心附かれしよ」とて、大に、ボート遊戯改良のことを述べられしが、その趣意は他ならず、ボートには、もと、レースの樂以外に、水の樂といふものありて、ことに、都下ボートの漕習所たる隅田川は、下に、品海あり、上に、三叉の江ありて、房總の山々、さては、富士、筑波の晴嵐さへも、一目に眺め渡さるる境なれば、その間に、船を放ちて、浩濤、漫波に、積日苦學の胸を洗ひ、しづかに、名山、大川の風を賞して、春花、秋月の趣を味はんは、まことに、この上

晴嵐

浩濤、漫波

好箇
競(競)

もなき快事にして、昔は、これらも、皆、ボートによりて得らるゝ樂なりしなり。されば、同じ體育を目的とするものの中にも、兼ねて、心神をも養ふべき、好箇の遊戯として、われも、人も、競うて、ボートに赴きしなり。さるを、レースの技、年を逐うて盛なるに隨ひ、ボートといへば、たゞ、レースの爲とのみ思ひ、舟に上れば、レースコース以外には、舟を行るべき所もなき様に思ふこととなれるは、まことに惜むべきことにて、ボートの樂は、爲に、その過半を奪ひ去られたり」といふ事にて

候ひき。

かくて、先生は、「君等の心附きしを幸、これより、同志相依りて、大に、その改良を圖られよ」とて、懇なる諭言もありしかば、僕等は、一層悟る所ありし様に覺えて、同志と共に、日々、その事ども語りくらし居り候。いづれ、御歸京の上、委しき事は申し上ぐべく候へども、まづ以て、御賛成を願ひたく、こゝに、一書を呈し候。 勿々。

四、おのれを屈せよ

贊(贊)

何くれと



ベンジャミン、フランクリンのまだ、十八歳の若者なりし時、ボストン府なる一老儒の許を訪れしことありき。その人は、心ちよげに、この少年を迎へて、何くれと物語せしが、やがて、彼を導きて、食堂に入らんとせり。その入口の戸は、頗る低くして、身を屈して入るに、あらずば、その人の頭は、必ず、鴨居に當るべきほどなるを、年少氣銳のフランクリンは、いま、老儒との快談

氣銳

叫(叫)

によりて、意氣、頗る揚れる折なりければ、さる事には、少も心づかて、たゞ一直線に進みぬ。屈むべし、屈むべし」と、老儒の叫びしかど、耳にも入らばこそ、少年は、已に、頭を、鴨居に撲ち付けたり。

不測の禍

「嗚呼、心なき少年よ。こは、まことに小事なり。されど、汝は、よく心して、常に、この一小事を忘るゝことなかれ。年少氣鋭の人は、常に、その眼を、高所に置きて、一たびも、わが身邊を顧みざるものなり。不測の禍、實に、そこに發らんとす。危きこと、板上に、玉を走らしむるが如し。思へ、汝の途上には、常に、汝の頭を打たんとする。

印す

數多の鴨居あることを、心して、おのれを屈するにあらずば、數多の大傷は、絶えず、汝の額上に印せられん。かくて、汝は、遂に、成業の期なけん」と、老儒は、懇にいひ聞かせぬ。

邂逅

裏裡
訓戒
心の駒

フランクリン、まさに、六十九歳の老年に達せし時、ふと、この老儒の遺子に邂逅せり。その折、彼は、當時の記憶を語り出でて、汝の、なき父君の親切なる教は、意氣燃ゆるが如くなりし、當時のわが心裏に、いひがたき、深き訓戒を與へたり。かくて、一旦、かうと思ひ立ちし志の、止めんにも止め難く、あはや、心の駒の狂ひ出

無謀

恩澤に浴す

猛進

客氣

さんとせし折々、わが心の底より涌き出でて、われと、わが無謀の行を止めしものは、その「おのれを屈せよ」との一語なりき。われは、まことに長く、その恩澤に浴したり。さて、世に、わが身の才智のみを恃みて、猛進せんとする、少年客氣の振舞ばかり危きはなし」といひき。

五、レッシングの比喩譚

鷺毛の純白なるは、まことに、霜雪と、その美を競ふに足れり。嘗て、一箇の鷺の、頬に、その羽毛の美を誇れ

前生

屑し

鷹揚

逍遙

あだなり

武骨

るがありて、ひそかに思へらく、わが前生は、恐くは鶴なりしならんと。これより、彼は、その同類と交ることを屑しとせず。ひとり、その群を離れて、強ひて、鷹揚なる態度を装ひつゝ、優然として、池上に逍遙せり。かくて、彼は、ふと、わが頸のつけねの短きに過ぎて、外觀の醜さに心付きぬ。やがて、満身の力を籠めて、それを引き延さんとせり。されど、そは、あだなりき。彼の頸のつけねは、餘に、武骨に過ぎて、引き延さんにも、力及ばざりき。さて、彼が苦心の結果は、いかなりしぞ。彼は、鶴となること能はずして、却りて、一箇の、畸形なる鷺とな

れり。

曾て、一匹の驢馬を、その危難より救ひたりし獅子の、それと相伴うて、森に行けるあり。無遠慮なる鶏、これを見て、樹上より叫んでいはく、「英邁なる君よ。君は、驢馬の如き輩と伍するを恥ぢざるか」と。この時、獅子は、徐に、「何者たりとも、來りて、余に投ずる者には、余は、好みて、任俠を施さんとす」といへり。英雄、豪傑は、いかなる弱者をも棄てざるが故に、彼等は、常に、その下に集ることを喜ぶ。

亂暴なる一少年を乗せて、さも得意氣に、こゝかし

英邁

伍す

任俠

亂(亂)

御す

こ驅け回れる馬あり。牛、その馬に對ひ、「さばかりの少年に御せらるゝこと、汝が、至大なる恥辱にあらずや」といへば、馬は振り反りつゝ、事もなげに答へて、「されど、いま、この一少年を振り落したればとて、余は、幾何の名譽をか博し得ん」といへりきとぞ。

六、畫家の苦心

泉州境に、一國寺といふ精舎あり。この寺は、千利休も、暫く居たりしところにて、數寄を凝したる座敷、五閒ほどもあり。一閒には、檜の樹、一本を畫き、一閒には、

數寄を凝す

臥したる鶴、二十五羽ばかり畫けり。いづれも、彩色ありて、古法眼元信の筆といひ傳へたり。

そのかみ、この繪をかける畫師、この寺に寓居せしが、何一つ畫くといふこともなく、日毎、圍碁にのみ耽りて、はやく、三年を経たり。住持は、いかにも心得ざる者かなと思ひて、ある時、その許、畫をもて、一家を成せりといひながら、筆を執りたることもなく、圍碁にのみ、年月を過さるゝはいかに。われ、衣食の費を厭ふにはあらねど、何處へなりとも遊び給へ。愚老も、所用ありて、京へ上り、ことによりては、一二年在京せんも測

一家を成す

遊ぶ

心構

り難し」といふに、彼の畫師聞きて、「それこそ、いと名残り惜しきことに候へ。さあらば、年來の謝恩に、何か、少しの畫を遺し參らすべし」とて、その心構しつるが、また、筆も執らで、四五日ほど經ぬ。住持は怪みてありつるに、ある夜、小坊主來て、竊に、かしこに行き給ひて、畫師の有様を覗き見給へ」といへば、行きて見るに、明障子の腰板に、身を憑せて、さまざまに、姿を變へつゝ、寢起する有様なり。こゝに、妨なさんも心なしと思ひて、そと、寢間にかへりぬ。

まだきに

あくる朝、畫師、まだきに起き出で、一間なる障子に

非凡
丹青

忍がけり。見れば、皆臥したる鶴なり。畫勢非凡にして、丹青の妙いふべからず。かくて、またの夜は如何にと窺ふに、前の如く、夜もすがら寢ずして、明けなば、かくや畫かんとや畫かんなど、ひとり呟きつゝあれば、住持は、知らぬ顔して過したるに、十日あまりにして、その鶴、およそ廿四五羽を忍がけり。またも、夜深けて覗き見るに、こたびは、肘を張り、足を伸べ、手を、口に當てつゝ、鶴の臥したる態をなせり。さて、夜明けて、畫師が許に行き、今日忍がき給はん鶴の姿は、かやうにやあらんと、よべ覗き見たる態して見せければ、畫師はう

いやとよ

ち驚き、住持には、わが畫かと思ひ構へし心を、いかにして悟り知り給へるにか」と問ふに、「いやとよ。昨夜、その許の有様を、そと窺ひて、知りたり」といへば、畫師は、それより、あとの二枚は畫かず、只、杉戸に、檜の樹一本を畫きて、東國へと出て立ちぬ。

さるに、東海道箱根の山中にて、檜の樹の枝の、心にかなひたるがありければ、東國へは下らずして、再び、一國寺に立ち還れるに、住持見て、大に驚き、東國へ行き給ふと聞きしに、又もや來られたるは、いかなる事か」といふに、曩に畫きたる檜の樹の枝、ひと枝足らぬ

ところあり。箱根にて、その意を得たれば、わざわざ立ち戻りたり」とて、一枝を書き添へ、暇乞して、再び出て去れりと云ん。(柳澤里恭—雲萍雜誌)

七、濠洲航路

横濱を發してより、およそ四晝夜にして、船は、香港に著す。さて、そこに碇泊すること三日間にして、同所を發し、約二晝夜にして、更に、マニラに到著するなり。それより、漸く進航するに隨ひて、大小の嶋嶼、洋上に見れ來るが、いづれも、南洋諸嶋の常として、樹木蒼鬱

蒼鬱

點綴
指點

模糊
模(模)

航程

水天鬚髯

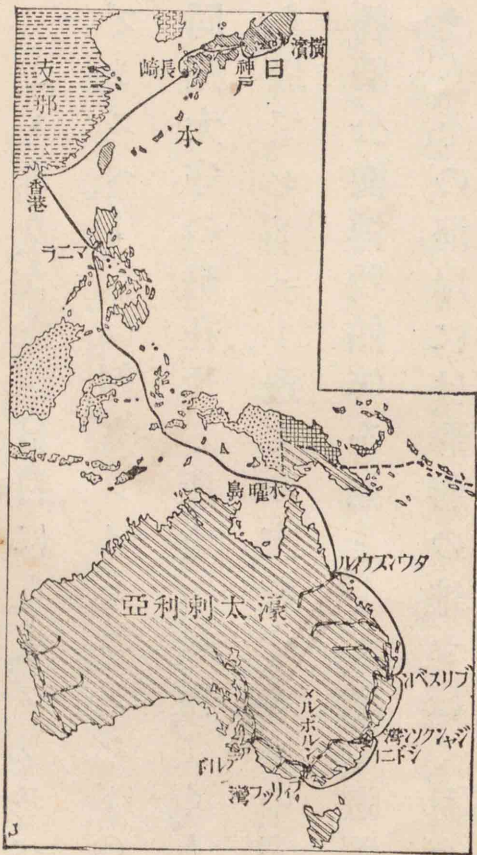
として、翠色相映じ、眺望、頗る佳なり。やがて、フィリピン
の群嶋の西南なる瀬戸にかゝれば、左右の兩岸、近く
相迫りて、椰子、煙草の類の繁茂せる様、土人の住居の
その間に點綴せる狀、一々指點すべし。海上には、また、
土人の、輕舸に棹して、常に往來せるなど、漁歌、棹聲、互
に相應へ、雅趣いふべからず。かくて、船の進むに隨ひ
て、洋上の嶋嶼は、漸次、その數を減じ、やがて、模糊たる
嶋影、幽に、水煙の裏に没し行けば、船は、再び、茫々たる
海洋の上に出づ。それより、航程、およそ三日間にして、
更に、水天鬚髯の間に、一點の青螺の横れるを認むべ

し。これ、即ち木曜嶋なり。香港を發してより、こゝに至るまで、航程、およそ一週間なり。

木曜嶋は、濠洲、クインスランド州のヨーク岬の北西、トレス海峡にありて、住民は、おもに、採貝業と漁業とに従事せり。さきには、我が邦人の、この地に出稼するもの、頗るおほく、盛に、採貝の業に従事せしが、上陸の制、嚴重にされるを以て、今は、著く、その數を減じた。この地は、その位地、熱帶圈内にありて、赤道を距ること、僅に十度餘に過ぎざれば、四時、日中の炎熱、甚だ強けれど、夜に入れば、また、清風おもむろに吹き來り

熱帶圈

て、そゝるに、冷氣を覺ゆるなど、晝夜の熱度の差違、殆ど別世界の感あり。



に著す。タウンズビルは、人口、一萬五千ありて、北クイ
ンスランドにおける、貿易の中心場なり。我が邦人の、

木曜嶋を

發して、更に、
その航路を
たどれば、四
日目には、タ
ウンズビル

砂糖耕作業の爲に、濠洲に出稼するものは多く、この地より上陸す。

こゝより、また、四日目にして、ブリスベーンに著す。ブリスベーンは、即ちクイーンズランドの首府にして、同州太守の駐在する所なり。氣候よく、人身に適するを以て、シドニー邊より來遊するもの、常に、おほし。植物園、公園、博物館等を始として、頗る、遊覽所に富めり。また、その海岸には、形勝の地おほく、月夜の觀、特に勝れり。

ブリスベーン港を出でて、航行すること四十時間

駐在

屈指

明媚

匹敵

崛起

ばかりにして船は、ジャクソン灣に達す。この灣は、世界屈指の良港にして、岬嘴、長く、南北より延長し來り、兩端、近く相迫りて、そこに、港口を成せり。その錨地の安全にして、また、その風光の明媚なる、よく、この港に匹敵すべきものを求むれば、全世界中、たゞ、僅に、ブラジル國のリオ、デ、ジアーネロ港あるのみ。船上より灣内を一瞥すれば、海岸は、屈曲、甚だおほく、港澳、所々に形成せられて、漁舟、頻に往來し、陸地は、海岸を離るゝに隨ひ、漸く崛起して、丘阜をなし、丘上、丘下、綠樹鬱蒼として、村莊、その間に隱見し、風景の美、まことに、筆紙のよ

偉觀

く悉すところにあらず。この港灣は、また英國の濠洲、及び太平洋艦隊の根據地なるを以て、灣内の嶋嶼には、砲壘高く聳え、頗る偉觀を極む。

長足の進歩

シドニーはこのジャクソン灣内にあり。ニッソーサウスウールスの首府にして、その人家の稠密なる、その商業の繁盛なる、今は濠洲第一の都府となりたれば、人呼びて、南洋の女皇といへり。その僅々數十年の間に、かゝる長足の進歩をなしたるは、北米のサンフランシスコ、シカゴの兩市と共に、あまねく、世人の歎稱するところなり。人口四十萬餘、大廈、高樓相櫛比し

櫛比

て、壯觀いふべくもあらず。

シドニーを發して、ジャクソン灣を出て、それより船は、常に、岸邊に沿うて進む。ゴボ嶋燈臺を過ぎ、ウイロン岬を通過し、およそ百哩ばかり駛航すれば、船は、やがて、フィリップ港口に達す。灣口に入れば、開もなく、メルボルンに著す。

駛航

メルボルンは、ビクトリア州の首府にして、新開の港地なり。この港の特色は、建築物の偉大にして、道路の構造の完全なるにあり。その大通オールドの如きは、九十九呎の廣さを有し、往來、運輸の便、最もよろし。當地の遊

構造

枚舉

價值

爛漫

恍として
故國

覽所は、その數甚だおほく、一々枚舉に違あらず。植物園、遊園、政廳、裁判所、郵便局、國會議事堂、大學校等、いづれも、一見の價值あり。カールトンと稱する遊園には、我が國より移植せる草花おほく、常に、その艷麗を競へり。ことに、四月下旬の頃には、菊花をはじめ、諸種の秋草、爛漫として咲き亂れ、美觀いふべからず。一たび、園中に入れば、人をして、恍として、故國にある想あらしむ。

八、山巔の題名

逕(徑)

荒涼
寂寞
巖(岩)
落々

慷慨

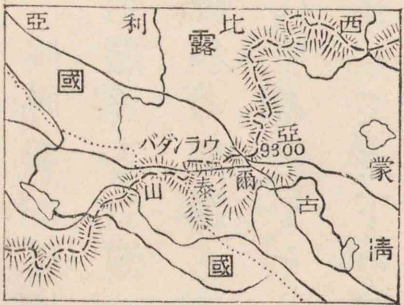
九月廿四日、朝七時半出で立つ。石逕を行き、沼澤を涉り、登ること五露里。午前十一時、アルタイ山の絶巔なるウランダバに達しけり。ダバとは、嶺といはんが如し。こゝを、清露二大帝國の境界と爲す。
少佐、境上に立ちて、四顧するに、境界の標もなく、守疆の人もなく、荒涼寂寞、風、樹梢に鳴り、唯、大石、巨巖の落々として、路によこたはるを見るのみ。その、いづれか露たり、清たるを知るべからず。乃ち、馬を、一老樹に繋ぎ、路傍に踞して、沈思すれば、感、中よりきたりて、慷慨に堪へず。おもへらく、大地は、渾然たる一大塊のみ。

心性の靈
軒輕

彷徨

何ぞ、歐亞の別あらん。況や、何ぞ、清露の別あるべき。しかるを、劃して、以て、二と爲す。これ、あに、自然の道ならんや。人の生を、この間に託する者、歐と亞と、清と露と、また、皆、横目縦鼻、心性の靈、固より、軒輕あることなし。さるを、往々、彼を尊び、此を卑む。誠に、謂なき至なり」と。彷徨躊躇、去ること能はず。乃ち、道左なる巨巖の上に登り、小刀を、懷に取り、巖上に、名を題して、いはく、「大日本帝國陸軍歩兵少佐福嶋安正、經過此地」と。山巔は、海面よりぬきんづること九千三百餘尺。身は、今、その最高處に立てり。慨然として、獨語して曰く、「汝、アルタイ

揚然



よ。地學上、汝の名、天下に高しと雖も、今、われ、汝より高きこと、更に六尺」と。遂に、巖を蹴て下り、揚然、馬に跨り、西の方、遙に、露國の山河を望みて、「さらばよ、露西亞」と叫びつゝ、一鞭すれば、馬は、既に、清領蒙古の土を踏みぬ。そもそも、蒙古より、西比利亞に向ふ路三つあるが中に、ウランダバを経るもの、最も險惡にて、かつ、宿驛もなきを以て、商賈、旅人、みな、道を、他の二道に取り、その、ウランダバに向ふ者は、殆ど希なり。されば、少佐、山中を行くこと數日

の間、一人にだに遇はざりけり。さらぬだに險惡なる道は、行旅往來の迹なきが爲に、益荒れて、益惡しく、實に、天下の至險なりといふ。

嗚呼、我が帝國軍人福嶋少佐の名は、長く、この至險、至惡なる亞洲の一名山に留まらん。よし、風霜の銷磨、陵谷の變遷ありて、他日、題名の石を求むる能はざるに至るとも、その事、その名は、永く、アルタイ山と與に存して、天下の耳目に在らん。おもふに、嘖々傳稱すること、久うして衰へず、以て、千古に不朽なるべし。これ、あに、少佐が譽のみならんや。實に、我が帝國のほまれ

風霜の銷磨

陵谷の變遷

嘖々

なり。(單騎遠征録)

九、騎馬旅行

駒をひかへて、見おろせば、
千山萬岳、いと低く、
雲はとどせり、北氷洋、
けむりは迷ふ、亞細亞洲、
心おごりの、せられつゝ、
ころも振ひて、うそぶけば、
空さへちかき、心地して、

心おごり

手にもとるべし、	日の御影。
腰のかたなを、	抜き持ちて、
立てるいはほに、	積む雪を、
うち拂ひつゝ、	今日こゝを、
われ踰えたりと、	彫りてけり。
しるし了りて、	こゑ高く、
あはれアルタイ、	なれこそは、
高きみねとて、	あめが下に、
名はとゞろきて、	聞ゆなれ。」
さはいへこゝに、	のぼり來て、

立てば汝より、	おのが身の、
高きはいかにと、	ほこらひて、
問へどこたへず、	あまつ風。」
たか嶺をあとに、	くだり來て、
あなたの麓に、	出でぬれば、
ひろき露西亞も、	かぎりにて、
今ぞ乗り入る、	蒙古の地。」

一〇、 曆法

曆法は、日と月と年との關係を定める方法で、これ

に、太陽曆と太陰曆とがある。

太陰曆は、月が地球を一周する時間を、基として立てた曆である。その一周時間は、二十九日と二分の一であるから、一箇月を、二十九日と三十日とに分け、合はせて十二箇月三百五十四日を、一箇年とし、また、二年乃至三年に、一箇月の閏月を置いて、季節におくれぬやうにして居る。

便宜

太陽曆は、地球が太陽を一周する時間を、基として立てた曆である。その一周時間は、およそ三百六十五日と六時間を要する。しかし、曆では、便宜上、三百六十

五日を、一箇年とする。その端數の六時間は、四年後には、一日となるから、四年目毎に、一日の閏をおいて、二月を二十九日とする。

ところで、端數の六時間といふのは、實は五時四十八分四十六秒餘であるので、この不足が積み重ると、季節よりは、曆の方が進んできて、四百年経つと、三日の差が生ずる。それ故、四百年間には、三度、閏を省くことになつて居る。明治三十一年の五月の敕令に、

整除

神武天皇即位紀元年數ノ、四ヲ以テ整除シ得ベキ年ヲ、閏年トス。但、紀元年數ヨリ、六百六十年ヲ減ジ、

百ヲ以テ整除シ得ベキモノノ中、ソノ商ヲ更ニ、四
ヲ以テ整除シ得ザル年ハ平年トス。

と定められた。わが紀元年數から、六百六十年を減ず
るのは、西洋の紀元年數に等しくする爲である。

この太陽曆を、西洋紀元前四十五年に、歴史で名高
い、ローマのケーザルが始めて、作ってから、今より三
百年前頃までは、この、多過ぎる三度の閏を棄てるこ
とに氣が付かなかつた爲、十日といふちがひが出来
て、そろそろ、氣候の狂が始つた所から、その頃のロー
マ法皇、グレゴリオ十三世といふ人が、これを改正す

布令

頑固

る布令を出して、諸國で、追々に採用したのだが、露西
亞一國だけは、頑固にも、これに従はないで、ちゃんち
やんと、四年に一度の閏を取つて居るため、今では、も
う、十三日の違が出来て、その元日は、一月の十四日に
なつて居る。

一一、日本海の大戦 その一

天佑

天佑、神助に依り、わが聯合艦隊は、五月二十七、八日、
敵の第二、第三艦隊と、日本海に戦うて、遂に、殆ど、これ
を撃滅するを得たり。

計畫 集中 豫定 姿勢 果然 踊躍 行動

はじめ、敵艦隊の南洋に出現するや、上命に基き、これを、近海に迎撃する計畫を定め、朝鮮海峡に、全力を集中して、徐に、敵の北上を待ちしが、敵は、一時、安南沿岸に寄泊したる後、漸く北行し來れるを以て、豫定の如く、數隻の哨艦を、南方に配備し、各隊は、一切の戰備を整へ、直に出動し得る姿勢を持したり。

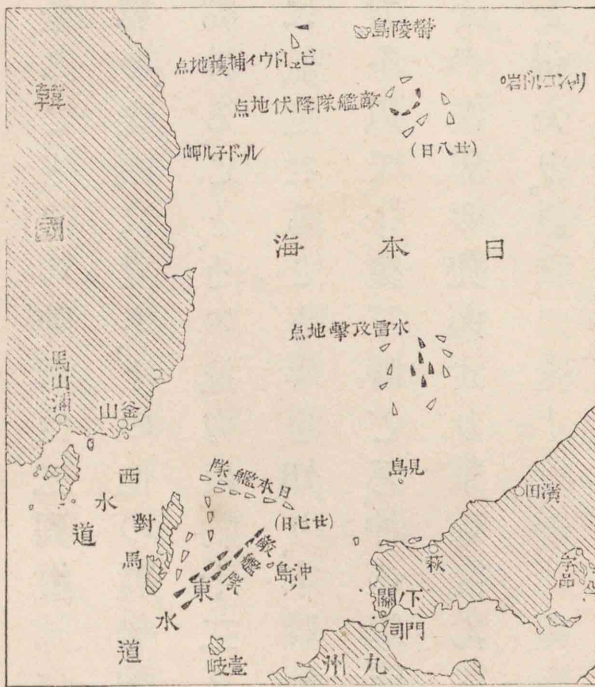
果然、二十七日午前五時に至り、哨艦信濃丸の無線電信は、「敵艦見ゆ。東水道に向ふものの如し」と警報せり。全軍踊躍、直に、對敵行動を開始せり。

午前七時、哨艦和泉、亦、敵の、北東に航進するを報じ、

交

展望

片岡艦隊、東郷（正路）戰隊、續いて、出羽戰隊も、午前十時十一時の交、壹岐、對嶋の閉より、沖の嶋附近にいたるまで、時々、敵の砲撃を受けつゝ、終始よく、これと、接觸を保ち、詳に、敵情を電報せしかば、海上、濛氣深く、展望、五海里以外に及ばざりしこの日も、數十海里を隔てたる敵影、恰も、眼中にうつれ



先頭

心算

るが如く、既に、敵の戦隊は、その第二、第三艦隊の全力なること、その陣形は二列縦陣にして、その主力は、右翼の先頭に立ち、その他の艦船約七隻は、その後尾に續けること、その速力は、約十二ノットにして、なほ、北東に航進せること等を知り、本職は、これにより、わが主力を以て、午後二時ごろ、沖の嶋附近に、敵を迎へ、まづ、その左翼の先頭より撃破せんとする心算を立つるを得たり。

午後一時三十分、主力艦隊、装甲巡洋艦隊、瓜生戦隊、各驅逐隊、及び、出羽、東郷（正路）戦隊等、前後して來り會

興廢

努力

壓迫

し、暫時にして、正に、わが左舷にあたれる南方數海里に、敵影を發見せり。こゝにおいて、戦闘開始の令を下し、わが全艦隊に對し、「皇國の興廢、この一戦に在り。各員、一層奮勵努力せよ」との信號旗を掲げたり。而して、主戦艦隊は、斜に、敵の先頭を壓迫し、装甲巡洋艦、これにつゞき、他の諸戦隊は、いづれも南下して、敵の後尾を衝けり。これ、わが豫定戦策なり。

敵は、わが壓迫を避けて、稍、右舷に、舵を轉じ、こゝに、砲火を開始せり。われは、暫く、これに耐へて、距離、六千メートルに近づくに及び、猛烈に、敵の左右の先頭艦

不規則

短縮

罹る

に、砲火を集中せり。敵は、これが爲に、益、東南に壓迫せらるゝもの如く、自然に、不規則なる單縱陣となり、我と並航の姿勢をとりしが、わが全隊の砲火は、距離の短縮とともに、益著き効果をあらはし、その左翼の先頭艦ヲスラビヤの如きは、須臾にして撃破せられて、大火災を起し、旗艦クニヤージ、スワロフ、二番艦アレキサンドル三世も、また、大火災に、罹り、相ついで、戦列を離れしかば、敵の陣形、いよいよ亂れ、他の諸艦、また、火災に罹れるもの多く、炎煙、西風に蹶きて、忽ち、海面を蔽ひ、濛氣と共に、全く、敵影を包みぬ。これ、午後二

時四十五分にして、彼我の勝敗は、既に、この間に決せしなり。

我は、煙霧のうちに、敵影を發見する毎に、緩に、これを砲撃しつゝ、敵の前路に出でしかば、敵は、俄に變鍼して、北方に、遁走を試みんとせり。我は、急に、その前路を扼して、再び、南方に壓迫し、猛射せしかば、敵の諸艦は、多大なる損害を受けて、頗る、混亂を極めぬ。この間に、壯烈なる事蹟として、特記すべきは、千早及び、廣瀬鈴木の兩驅逐隊が、敵の敗艦スワロフに對し、二回まで、勇敢なる水雷攻撃を決行せしことなり。

勇敢

壯烈

混亂

鍼(針)

離散

春く

傳令

かくて、われは、洋上に彷徨、離散せる殘敵を、縦横に搜索して、これが撃沈につとめぬ。この時、夕陽、すでに春き、わが驅逐隊、水雷艇隊は、漸次に、敵に逼れるを以て、主戰艦隊は、日没と共にひきあげ、同時に、本職は、全軍北航して、明朝、鬱陵嶋に集合すべし」と傳令せしめ、こゝに、當日の晝戰を結了せり。

一二、日本海の大戦 その二

この日、朝來、南西の強風、浪を揚ぐることに高く、夕刻に至りて、風、やゝ和ぎたれども、浪、なほ靜らず。洋中の

露國 第三 東洋艦隊

艦種	艦名	噸數	艦種	艦名	噸數
戰艦	スワロフ	三五六	巡洋艦	オレグ	六六五
同	亞歷山三世	三五六	同	スウェイトワナ	三七七
同	アリヨートル	三五六	同	セムチユーク	三〇三
同	ポロチノ	三五六	同	アルマーズ	三八五
同	ラスラビヤ	二六四	同	イズムルード	三〇三
同	シナイマキヤ	一〇〇〇	海防艦	アラキシン	四二六
同	ナワリリン	一〇〇六	同	カシヤーク	四二六
同	ニコライ一世	九五九	同	セニヤイグン	四九六
裝甲巡洋艦	モノマフ	五五三	◎この他驅逐艦九、假裝巡洋艦一、特務船六、病院船二隻		
同	ドンスコイ	六二〇	(備考) ●は撃沈、○は捕獲、△は逃走、◎は逃走後沈没の符		
同	ナヒイモフ	八五四			
巡洋艦	アウローラ	六七三			

水雷攻撃は、不利尠からざりしが、各驅逐隊、及び艇隊は、この千歳一遇の時機を失するを恐れ、皆、風濤を冒して、日没前に來り會し、各先を争うて、敵の周圍に蟻集し、午後十一時頃に至るまで、連續肉薄して、激烈なる攻撃を加へつ。敵は、探照砲火を以て、極力防戦せし

極力

状態
血路
覓(覓)

が、遂に、この攻撃に耐へず、僚艦相失して、四分五裂の
状態となり、各、一方の血路を覓めんとせしかば、わが
追撃のために、一場の大混戦を現出し、少くも、敵艦三
隻は、この間に、わが水雷に罹りて、全く、その戦闘航行
力を失ひぬ。後日、捕虜の言を聞くに、當夜、水雷攻撃の
猛烈なりしは、殆ど、言語に絶し、左右應接に遑なく、か
つ、その距離、あまり近き爲に、備砲、俯角の度を過ぎて、
照準する能はざりきといふ。

黎明

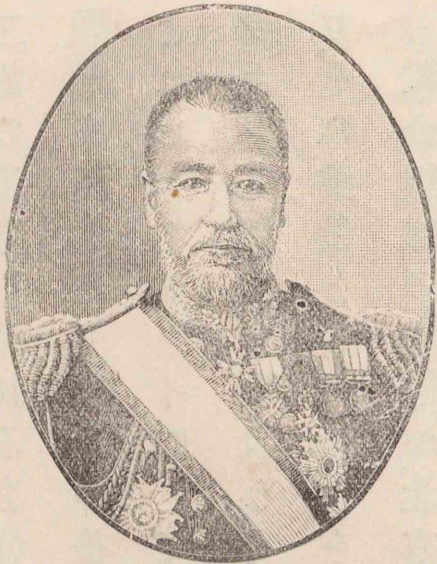
二十八日、黎明、濛氣拭へるが如し。既に、鬱陵嶋附近
にありし、我が艦隊は、はやくも、東方にあたり、艦隊の

絶す
應接に遑な
し

主力

煤煙數條あるを發見せり。これ問はずして、殘敵の主
力たるや明なり。即ち、三方より、これを包圍す。固より、

優勢
抵抗



東郷平八郎

敗餘の敵艦、已に、多大な
る損傷を負へるのみな
らず、わが優勢に抵抗し
得べきにあらざれば、砲
火の開かるゝや、須臾に
して、白旗を掲げ、敵艦司

令官ネボカトフ少將は、その戦艦四隻を擧げて、部下
と共に、降意を表しぬ。本職は、特に、將校以上に、帶劔を

追及

許して、これを受けたり。

驅逐艦、漣陽炎は、鬱陵嶋附近において、敵の驅逐艦二隻の遁走し來れるを發見し、極力、これに追及して、戦闘を開始せしに、その後續艦は、遂に、白旗を揚げぬ。これ、ビエードウイにして、敵艦隊司令長官ロゼストウエンスキー中將、及び、その幕僚の移乘し居るを知り、その乗員と共に、これを捕虜となせり。

聯合艦隊の大部が、北方追撃の戦果を收むるに汲汲たる際、南方、前日の戰場においても、亦、相應なる殘獲ありて、敵艦數隻を撃滅したり。

收(収)
汲々

支障

抑、日本海を通過せんとせし敵艦隊は、約三十八隻にして、わが撃滅、或は、捕獲に洩れたりと認むるものは、巡洋艦、驅逐艦、及び、特務艦、各數隻に過ぎず。この二日間の戦闘において、わが失ひたるものは、水雷艇三隻のみ。その他、多少の損害を蒙りたるものあれども、一として、今後の役務に、支障あるものなし。

この大戦における敵の兵力、我と、大差あるにあらず。敵の將卒も、また、その祖國の爲に、極力奮闘したるを認む。しかも、わが聯合艦隊が、よく、勝を制して、奇績を收め得たるものは、一に、

祖國
奇績

稜威

神靈の加護

感激

天皇陛下の御稜威の致す所にして、固より、人爲の能くすべきにあらず。殊に、わが軍の損失、死傷の僅少なりしは、歴代神靈の加護に依るものと信ずる外なく、嚮に、敵に對し、勇戦したる麾下將卒も、皆、この成果を見るに及びて、唯感激して、そのいふところを知らざるものの如し。（東郷聯合艦隊司令長官公報による）

一三、今上天皇御製

夢さめてまづこそ思へいくさ人

むかひし方のたよりいかにと

國をおもふ道に二つはなかりけり

いくさの庭に立つも立たぬも

こらは皆いくさの庭に出ではてて

おきなやひとり山田もるらむ

よもの海みなはらからと思ふ世に

などなみ風の立ちさわぐらむ

一四、赤十字社

國と國との交際が破れて、兩國の臣民が、互に、義を重んじ、命を輕んじて、戦場に、血を流すことは、まゝあ

四海兄弟

るが、これも、國家の大事、已むことを得ぬからであります。されば、一旦、傷病者となつて、戦鬪力を失つた者に對しては、敵もなく、身方もなく、四海兄弟、萬國一家のよしみを以て、相互に救ひ合ふのが、即ち、人の道であります。

今から四十餘年ほど前、英佛二國が聯合して、露國を攻めたことがあつて、これを、クリムの役といひます。この役は、二箇年にわたつた劇戦で、そのうへ、悪疫が流行して、傷者、病者は、海陸に充滿し、如何とも、始末がつかぬのでありました。その時、英國の貴女ナイチ

ンゲールが、同志の婦人を募つて、奮つて、戦地に赴いて、敵、身方を問はず、傷病者を看護したので、兵士は、神のやうに仰ぎ、慈母のやうに懷きました。赤十字社の事業は、全く、こゝに根ざされたものであります。

それから五年の後、奧佛伊三國の兵が、伊太利の原野で、二晝夜大劇戦を續け、死傷が、無數でありました。瑞西人ヂウナンといふ人が、この慘狀を目撃して、戦時救護の必要を感じ、ひろく、これを、天下に訴へ、到頭、各國の賛同を得て、赤十字中央社を、瑞西のシウネーブに設立しました。旗章は、赤地に、白十字をあらはし

慘狀

賛同

組織
參酌

た、瑞西の國旗に基いて、白地に、赤十字を用ゐました。これが、赤十字の名のおこつた所以であります。

我が國では、明治十年の西南の役に、佐野常民、大給恆の二氏が、歐洲の赤十字社の組織を參酌して、急に、一つの救護會社を設け、「博愛之謂仁」といふ古語によつて、博愛社と名づけ、大總督府の許可を得て、兩軍の傷病者を救護しました。その際、聖上には、金を賜りて、これを獎勵せられました。

明治十九年、わが政府は、萬國赤十字同盟に加入したから、この社は、その翌年、始めて、日本赤十字社と改

公認

監督

稱して、その中央社の公認を得ることとなりました。よつて、諸般の組織を改め、規模をひろめて、天皇、皇后兩陛下の、至貴至尊なる御保護をいたゞき、宮内、及び、陸海軍省の監督を受けて、その業務を執ることとなりました。そして、平時も、病院を開いて、看護婦を養成して、戦時の練習をしたり、又は、天災、事變の傷病者を看護したりして居ります。

明治二十六年までは、社員の数、が、まだ、十萬に満たなかつたが、日清の役が起ると同時に、一朝、二十萬といふ數に達し、今ははや、百萬の數を呼ぶやうにな

先進

りました。日清、日露の二役を経て、救護事業は、益完全して、その組織や、その方法に、却って、先進文明國の模範となるものが多いといふことであります。

一五、アレクサンドル大王の逸事

弱冠

世に、功名心もたぬ人はなけれど、アレクサンドル大王ばかりの人は、また無かるべきか。大王は、弱冠の頃より、既に、その、おそろしき功名心に驅られ、父王が戦勝の報、王宮に達する毎に、荐に、歎息の聲をもらして、「嗚呼、父王は、我をして、功名の餘地なからしめんとす」とかこち居

餘地

馬蹄に委す



一斑
全豹

たりきといふ。二十歳の時、父王の死後を受けて、マケドニアの王位に即きしが、掌大の地もとより、その大志をみたすべくもあらねば、大王は、遂に、波斯征討の大軍を起しき。鋭鋒の向ふところ、亞細亞の全土、大半、その馬蹄に委したりき。この戦役は、大王の史傳中、最も興味あり、最も光彩あるものにして、その陣中の逸事、頗る多し。左に譯出せるは、その一斑に過ぎざれど、また、以てその全豹を窺ふに足らんか。

その一

小亞細亞の東南の端に、タルズスといふ町あり。チ
ドヌス河、その中央を流れたり。一撃の下に、大王は、こ
こをも征服し給ひぬ。河水の、見るから清げなりけれ
ば、王は、衣服を脱ぎて、その中に入りて、浴し給ひしほ
どに、劇しき熱、急に、身中に發り、顔色蒼白に、四肢慄ひ
戰きて、仆れかゝり給ひ、纔に、侍臣に扶けられて、水を
出で給ひぬ。頃しも、波斯王ダリオス、コドマヌスは、大
軍を督して、進軍の途にありければ、全軍の驚一方な
らず。いかにもして、大王の、一日も早く快復しましま

さんことを祈れり。されど、王の病は、益重りに重りて、
今は、侍醫の人々も、救ひまゐらせん道なし」といふに
至れり。

最後の手段

ここに、心まめなる侍醫の、フィリップスといふがあ
りけり。王の病革れるを見て、いたく、心を病ませたり
しが、ほかに、救ひまゐらせん道もなかりければ、彼は、
遂に、最後の手段に訴へて、事を、萬一に決せんと思ひ
ぬ。その、進めんとする薬は、頗る危険のものなれど、こ
の危険を冒すにあらでは、遂に救ふべき術なきを、い
かにせん。かく思ひ定めつゝ、その薬劑をとゝのへつ

祕書

つありしをり、大王はその信任し給へる大將バルメニオ將軍より、祕書を受け給ひぬ。書の大意は、「王よ。フィリップスを信じ給ふことなかれ。彼は、波斯王に、心を寄する疑あり。まゐらせん薬こそ、危険のきはみなれ」とありけり。大王は、しづかに讀み了へて、そと、枕の下に推しやり給ひぬ。折しも、フィリップスは、薬を捧げて入り來ぬ。王は、右手に、盃を取り、左手に、さきの祕書を取りて、侍醫に渡し給ひぬ。フィリップスの讀み了へし頃は、はや、王の、薬を飲み干し給ひし時なりき。侍醫は、由なき疑を釋かんとて、口を開かんとせしほどに、

由なし

立證

牀(床)

畏敬

王は、軽く、手を以て、これをとゞめ給ひ、「余は、汝を信ず。事の結果は、汝の邪正を、明に立證すべし」とぞ宣ひける。かくて、薬效空しからず、王の病は、直に、快復の運に向ひ、三日の後、病牀の人は、再び、馬上の人となれり。これを傳へ聞きける將士等、みな、王の物を疑ひ給はぬ。赤心と、その大膽にして、決心固きとに驚かざるはななく、益、畏敬の念を増したりきといふ。

その二

ガウガメラの戦に、波斯の全軍、殊死して戦ひ、その勢、實に當るべからざりき。されど、マケドニア軍の進

退、よく、その法にかなひ、最後の勝利は、遂に、大王の上
に落ちぬ。ダリオスも、今は、遂に、退軍の已むなきに至
れり。マケドニアの軍、これを追ふこと、頗る急なり。や
がて、砂漠の中に出てぬ。さすがのマケドニア軍も、連
日の戦に疲れて、今、この、一望きはみなき砂漠の中に
出でければ、その困苦いふべくもあらず。全軍渴する
事甚しけれど、あはれや、そこには、一滴の水もあらざ
りけり。

こゝに、一兵士の、少許の水を見出したるがあり。彼
は、この、貴き水を、われ一人飲むに忍びず、胃の鉢に盛

渴を醫す

り捧げて、恭しく、大王の馬前に進めり。王は、こゝちよ
げに、その兵士にうなづき給ひ、汝の厚意は、快く受け
ん。されど、われひとり、渴を醫するに忍びんや」とて、そ
を、地上にうちあげ給へり。王の、この同情の心は、いた
く、全軍の將士を感激せしめ、見よ、大王の、我等と、苦を
共にし給ふを。かゝる王に従はんこそ、我等が、至大な
る名譽なれ。今は、火水をも辭すべけんや」と叫びて、全
軍、また、勇み勇みて、進軍せりとなん。

辭(辭、辭)

その三

ダリオスは、遂に、その臣下のために弑せられぬ。大

死に瀕す

王の旗下の士、波斯王の死に瀕して、途上にあるを發見せり。苦しき息の下より、波斯王は、一盃の水を乞うて、一息に飲み下し、その兵士に向ひていふやう、「我は、汝に、この恩を報ずる時なきを憾とす。されど、汝の大王は、必ず、我に代りて、汝を賞せらるべし。往いて、汝の大王に告げよ。我は、今、こゝに、こゝろよく、我が全土を、大王に捧げまつるべし」と。かくいひ畢へて、遂に瞑目せり。大王は、直に、こゝに來給ひぬ。この光景に對して、限なき感慨の念に打たれ給ひけん。みづから、我が上衣の、金絲燦爛たるを脱ぎて、そと、波斯王の死屍の上

燦爛

暗涙

に掛け給ひ、詞はなくて、そゝろに、暗涙に咽び給ひきとぞ。

一六、見料

著作家ボルテールの門を敲いて、面會を求めに來た客がある。素より、何の面識もなく、また、紹介もない。主人は、書生に、不在の趣を以て、斷らせた。ところが、承知しない。私は、今、こゝで、現に、先生の聲を、餘所ながら聞きました」といふ。ボルテール、そこで、「煩って寝てゐる」といはせた。すると、「私は、職業が醫者であるから、幸

に、先生を診察する榮を得たく存じます」といふ。ポルテール、面倒でたまらず。今度は、一思に、「先生は、只今死なれました」といはせた。するとまた、「それはそれは。然らば、第一會葬者たる榮を得たく存じます」といふ。これを聞いたポルテール、大に笑つて、そこで、面會していふには、「君は、わが輩の詩名を聞いて、見世物を觀る料簡で、見に来たのだらうと信ずるから、見料十二錢を出し給へ」といふと、その客懷から、二十四錢を出して、ポルテールの前に並べて、「私は、明日、もう一遍來て、貴方を見ようと思ふから、二回分の見料をさしあげ

て置きます」といった。

オニ馬子期終り

一七、 高價の笛

今は、はや、數十年の昔となりけり。われは、纔に七歳に達したる時のことなりき。ある大祭日に、遠き田舎の伯母君の尋ね來給ひて、「何にても、好きもの買へ」とて、若干の銅貨を與へられたり。その頃、わが住める町のはづれに、子供の玩具など商へる店ありしが、その店頭陳列せられたる、うつくしき玩具は、平生、わが眼を射ること頻なりき。こゝに、今、すくなからぬ銅貨

陳列

を得たれば、平生の望、まさに達せりと思ひつゝ、急ぎ走り出でて、その店の方へと向ひぬ。途に、一人の童子あり。笛を、極めておもしろく、吹きすさべり。我は、その音のゆかしさに、ふと、足を止めしが、はては、その笛の、頻に欲しくなりて、遂に、持てるすべての銅貨を與へて、それに換へぬ。

かくて、我も、亦、おもしろく、それを吹きすさびつゝ、歸るともなく、わが家に歸り來れるに、家の一間に戯れ居たる兄弟、姉妹、また、從兄弟など、齊しく、われを見て、「その笛は、いかにして得たるか」と問ふ。われは、さも得

姉(姉)

後目

意げに、その事語り聞かせつるに、最も年長なる從兄は、われを、後目に見て、「汝は、いかなる愚物ぞや。汝もし、その笛を、かゝる多額の銅貨に換へんとすれば、われは、幾百本にても、新しき笛を買ひ來て、汝と交換せん。さらば、われは、直に、富豪となることを得べし」といひて笑ふ。「さなり、さなり」と、一同、これに同じて、はては、一度に、どつと笑ひ崩れたり。われは、爰に、はじめて、わが心無かりしことを悟りぬ。かく、心附くと共に、先の嬉しかりし情は、何とも分かぬ、不快の念に移り、人々の手前も、何となくはづかしくなりければ、急に、室を立

笑ひ崩る

刺撃
印象

ち出で、そともの方に行きて、その笛を投げ棄てて、うち泣きぬ。

こは、まことに、わが愚なる行なりき。この一事は、いかに、わが、幼き頭腦を刺撃して、いかなる深き印象をか刻みたりけん、數年の後までも、絶えず、新しき記憶を、我にひき起さしめぬ。かくて、幼き心に、あの物の買ひたし、この物を求めたしなど、あらぬ慾念の起れる時々、われは、直に、この笛の事を思ひ出でて、嗚呼、再び、たかき笛を買ふべからずと、深く、みづから戒めぬ。歲月は流るゝが如く、われも、いつか生長して、世に

社會

慾望

束縛

出で、社會に交り、國民として、社會の一員として、世のさまざまの出來事に遭遇するやうになれるが、この、わが幼時の過失を思ふ情は、益、深くなりぬ。

あらぬ人間の慾望を満し、あらぬ口腹の慾情を恣にせんが爲に、わが家庭の平和を破り、己の自由を束縛し、友のなさけ、人のなさけをも棄て、はては、我が心の平和をも破るに至る、人の身の上を見るたびに、我が心は、常に、われに向ひて、嗚呼、汝は、汝の好める笛の爲に、かゝる高價を拂ふ愚を、再びすべからずと、みづから戒めぬ。

投機

また、かの、投機めきたる事に、その身を委ね、わが家業を棄て、わが家産を傾け、遂に、その家族をして、路頭に迷はしめて、しかも、何等の國に益するところなき、人の上を見るにつけ、さても、その笛の價の高さよと、みづから戒めぬ。

吝嗇
蓄財

また、かの、吝嗇にして、その蓄財の爲に、人を欺き、朋友、親戚をも陥れ、遂には、親兄弟をも棄てて、顧みざるに至る、人の上を見るにつけ、さても、その笛の價の高さよと、みづから戒めぬ。

また、彼の、美しき衣服を好み、高閣、樓臺の住みよき

指笑

に移り、しかも、収入の、これに伴はざるが爲に、莫大の負債をなして、世にも、人にも指笑せらるゝ、人の上を見るにつけ、さても、その笛の價の高さよと、みづから戒めぬ。

人情

かくの如くにして、我は、こゝに、固く信ぜり、好める方に就かんは、人情の常なれば、強ひて、これをとむべきにはあらねど、只、よく、その身と、その境遇とを顧みて、常に、正當の價を以て、その笛を買はんことを務めざるべからず。好ける心にひかれて、あらぬ高價を拂はんが如きは、最も戒むべく、最も慎まざるべから

信念

ざることなりと。この信念は、わが一生を通じて、今に
變らず、わが心の戒となり、わが身の益となりしこと、
實に少々にあらざるなり。(フランクリン談話)

一八、一燈錢

盡(盡)

この度、同社中申しあはせ、自分自分の力を盡し、
骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたき
事に候。非常の變、不意の急に差し懸り候はんに
も、囊中拂底にては、さし支ふるものに候。有志の
人の、牢獄に繋がれ、又は、飢渴に迫り候ものも、お

非常の變

拂底

義士、節婦

有餘

ひおひ相助けたく、義士、節婦の碑を立て、墓を築
く等にも、力を盡し、手を延したき事に候へども、
同社中、有餘の金もあるまじき事に候へば、毎月
寫本なりともして、僅の貯蓄致し置きたく、月末、
松下塾まで、銘々持ち寄り致すべく候。半年にも
せよ、一年にもせよ、塵もつもれば、山となる理に
て、きつと、他日の用に相立つべく考へられ候。尤
も、同社中、身の膏を搾り出して、集むる事なれば、
迂闊に費すべきにあらず、已むを得ざることあ
らば、同社中申しあはせの上にて、取り揃へ申す

迂闊

長者

貧者の一燈

至誠

べく候。抑、人を救ふも、用に備ふるも、富貴、長者の
の身ならば、猶、如何様にも相計ふべけれど、我々
にては、かくまでにするは、貧者の一燈とも申す
べき事に候。至誠の貫かぬ理は、よもあるまじく
候。これに依つて、この度取り立て候金を、一燈錢
とは名付くるにて候。

一、 毎月、寫本六十枚づつ、村塾まで、必ず持ち寄
るべく候事。

一、 寫本料は、先師の定むる所、眞字、十行二十字
五文、片假名、同斷四文の事。

一、 一日、僅に二枚づつの事なれば、さまで、勉強
のならぬ事はあるまじ。若し、この枚數不足の
時は、代を以て相償ひ、必ず持ち寄り、これある
べき事。

右の條々、この度申しあはせ候。これ式のこと、
骨を惜み候ほどにては、我々の至誠つらぬき候
ことも覺束なく候やう、相考へられ候。銘々、きつ
と怠らぬやう致したき事は、申すもおろかに候。
以上。(久阪元瑞)

覺束なし

一九、春の巴里

公園の中にて、最も大なるは、ポアーといふ處なり。はじめ、その中に入れるものは、出口を失ひて、飢渴するものも少からずといふ。こゝには、大なる池ありて、あまたの遊客、ボートレースなどするに、鶯鳥、鶴などの戯れかゝれる、かの、古の文王の囿も、かくやとさへ思はる。瀧どもの多き中に、湯をさへに落せる、異様ならずや。一賭萬金の競馬は、こゝの奥にて行はるるが、見物人、山の如く、その狀狂するが如し。

花は植ゑられて、或は、モザイク風に、或は、天然の

文王の囿

異様

意匠

目もあやに

しのぶ

まゝに、各、その専門家の意匠によりて、育てられたるものなれば、見るに飽くことなし。すべて、花は、室にて咲かせたるを、各公園、さては、道の邊に、壇を築きて、移し植うることなれば、四時の區別なきやうなれど、春は、一しほ、色香を増すのみならず、その種類も多ければ、目もあやに、うつくしきこと、えもいはず。

この頃は、躑躅、紫陽花、野菊、堇、水仙、釣鐘草など、御國にて見慣れたるも多し。その道の人の話に、「日本ばかり、花の種類多きはあらじ。この品も日本なり、かの花も日本なり」と聞くに、いかで、しのび出づることなか

人士

一夕の歡

一攫千金

知名

敷地

らん。中にも、菊と躑躅とは、ことに、歐洲の人士にもてはやさるゝもめでたし。ある時、花の市ありしに、蘭の一房を、三千法にて買ひ取り、一夕の歡に費しし人ありき。かゝるさまなれば、佳き花を作り出でたる者は、一攫千金を得ること、さして、難事にあらずとぞ。

繪畫、彫刻の博覽會は、このごろ、シヤンド、マルスに開かれたり。繪畫は、二千餘點に達し、彫刻は、三百餘點と數へらる。いづれも、當世知名の人々の刀筆に成れり。場内の廣さは、我が上野博物館の敷地位はあるべきか。鐵骨玻璃張の建物なり。彫刻の大なるは、五六間以

象(象)

上なるあり。繪畫の大なるは、七八間に亘れり。歴史、風俗、肖像、景色など、さまざまに書き分けたる、一日二日にては觀盡すべくもあらず。場内に、料理店あり。休息所あり。こは、巴里サロンといひて、我が美術展覽會の如く、私立のものながら、その規模、結構は、甚だ壯なり。集る人々は、老若男女、日々に數萬なりといふ。

日影うらゝかなる公園に、小兒などの、數多遊べる、いと愛らし。或は、象に乗り、或は、駝鳥に、車挽かせつゝ、往き交ふなど、めづらし。ことに、盛砂などある處に寄りきて、彼の、小さき手して、掬ひ上げては下し、下しては

掬ひ上げて、何心なくうち遊べるに、母なる人が、子守がてら縫物せんとて、その物取り出すを、やがて邪魔しつゝ、あまえかゝれるなど、西も東も、罪なきは小兒なり。

いつもあることながら、春になりて、殊に、多きはコンミニヨンといふことなり。これは、男女十二歳に達すれば、寺に往きて、聖餐を受くる儀なり。男は黒服にて白襟、女は、悉く白装にて、頭髮にも、白布を被れり。かくて、一家、及び、親戚に連れられて、式に赴く。そのさま殊勝なり。昨日今日、大路小路を歩くに、この者に逢ふ

こと、數を知らず。

崇拜
名殘

こゝに、又、奇怪なる話あり。そは、五月五日、太陽、凱旋門の中央に没すといふことなり。こは、プラス、ド、ラ、コンコルドより、夕日を見て、いひ始めし事なるが、そのもとは、この日は、即ち、ナポレオン第一世が身まかりし日なればなり。これ、我が國の西郷星などいふ類にして、英雄崇拜の名殘、またゆかし。

木の花は、御國の櫻にまされるはなし。竝木のマルニエーといふ木は、この頃盛なれど、こは、花を賞すべきものにあらず。この國人の、「日本には、春なし」といへ

るはもとより當らぬことなるが、かく、竝木の青々と
して、葉の美しきを見れば、何となく、花の散りたるが
ごとき心ちせられて、こゝにこそ、春なきやうには思
はるれ。(池邊義象―佛國風俗問答) *オニ學期試驗之由也*

二〇、農業の快樂

農業は、人をして健全ならしむ。すべての人は、樹木
と同じく、大氣中に生活せざるべからず。しかして、農
業の生活は、概して戸外的なるを以て、最も、この目的
に適へるものなり。

戸外的

著實
性急

妙理

科學的

活動の妙機

因果
整然として

農業は、人をして著實ならしむ。いかに性急なれば
とて、播きたる種の、直に實らんことを望むものはあ
らじ。また、いかに、奇法ありとも、播かぬ種の生すべき
理は無からん。所謂「人事を盡して、天命を待つ」といふ
妙理は、手を、農業に染めて、はじめ、よく、これを了解
するを得べきなり。

農業は、人をして、科學的精神を養はしむ。農業は、常
に、天然と接するものなり。されば、その發達、その變遷、
その活動の妙機は、仔細に、これを觀察することを得
べく、また、その間に、おのづから、因果の理法の、整然と

會得
美趣
詩情

培養

して、動すべからざることを會得し得べきなり。

農業は、人をして、美趣を解し、詩情を養はしむ。支那の陶淵明は、嘗て、その詩情を、田園に養ひ、その詩材を、農業に取りて、千古の大詩人となることを得たりしにあらずや。その他、詩趣を、無名の野花、幽草の上に討ねて、自然の美を歌ひ出で、大詩人たる名譽を荷ひ得たるもの、東西、古今、その例に乏しからざるなり。

農を本業となす、固より可なり。他の職業に従事するもの、これを、餘業となす、亦、頗る可なり。掌大の庭園も、數株の花木を培養するには、餘あり。況や、彼の、地方

殺戮

香壤

に、別墅を有する人においてをや。これほど容易なる事はなかるべく、また、愉快なる事もなかるべし。これを、彼の、鳥獸を殺戮して、一時の快を貪る銃獵の如きものに比すれば、その趣、その樂、あに、啻に、香壤の差異あるのみならんや。(徳富猪一郎)

二一、地殼の變動

我が地球の屬する太陽系統は、最初、極めて、熱度の高い、瓦斯のおほきな塊であつたのが、次第に凝つて、中心は、太陽となり、周邊には、大小無數の遊星が出來

系統

周邊

凝固

た。この地球も、素より、その一部分であるから、初は、やはり、熱度の極高い、瓦斯の塊、次には、岩石を熔したやうな、極めて熱い液體の塊となり、次に、その塊の表面が、少しく凝固して、薄い地殻が出来たのである。

假想

かやうなことは、傍で見て居た者がある譯でないから、無論、假想の説には相違ないが、多くの地質學上の事實は、これに由つて、容易に、説明することが出来るゆゑ、他に、なほ一層適當な説が無い以上は、まづ、眞と見做して置くより外に、仕方がない。現今でも、處々に、火を噴き、煙を出す山があること、處々に、温泉の涌

冷却

き出ること、及び、何處でも、地面を、深く掘れば掘るほど、底が、益温くなり、平均十六、間位を掘る毎に、攝氏の一度づつの割合で、溫度が昇ることなどから考へて見ると、地球の内部は、なほ、火の塊であるらしい。

又、表面にある、固形の地殻は、この火の塊が、段々冷却した結果として、生じたものと思はれる。すべて、何物でも、冷えると、容積が減ずるものであるから、この地球も、追々冷えて行く中に、少しづつ、容積が減じて收縮し、收縮すれば、表面の地殻には、是非とも、皺が出来る。その有様は、全く、林檎の實を、長く捨て置くと、水

分が蒸發して、全體が縮小し、そのため、表面に、皺が生ずるのと同じ理窟である。

されば、地殼の變化は、かやうに、何萬億年かの間に、表面に、皺が生じて、段々、山と海との區別が出来て、その區別が、追々著くなることの外には、唯、風雨の働、河海の働等の如き、我々が、日夜、目の前に見て居るやうな、尋常一様の自然現象の結果として、起つたものである。風が吹き、雨が降る毎に、山の表面にある岩石は、少しづつ碎けて、泥砂となつて、谷へ落ち、河の水におし流されて、海の出口の處に沈澱して、年々、新しい層

尋常一様
自然現象

沈澱

を造ることは、我々の、現在、處々で見ることである。何新田といふやうな名の附いて居る處は、多くは、かやうして出来た地殼である。

かやうに、泥砂の沈澱によつて生じた層は、最初は、無論、水平に出来るが、地球が少しづつ冷却して、地殼に、皺が殖えるに伴ひ、後には、褶をなして、種々の方向に傾斜し、一部は、山の頂となつて現れ、他の部は、後の層に埋められて、深く、地面の下に隠れるやうになる。彼の、高い山の頂上から、魚類や、貝類の化石の出るのは、全く、右の如き變動によるので、決して、一時に、急劇

傾斜

な天變地異があつた結果ではない。尤も、近年の西印
度の噴火、又は、鳥嶋の破裂の様なものもあるが、これ
は、地球全面から見れば、實に、極めて小部分で、大體を
論ずる場合には、殆ど、勘定に入れるには及ばぬ程で
ある。(丘淺治郎—進化論講話)

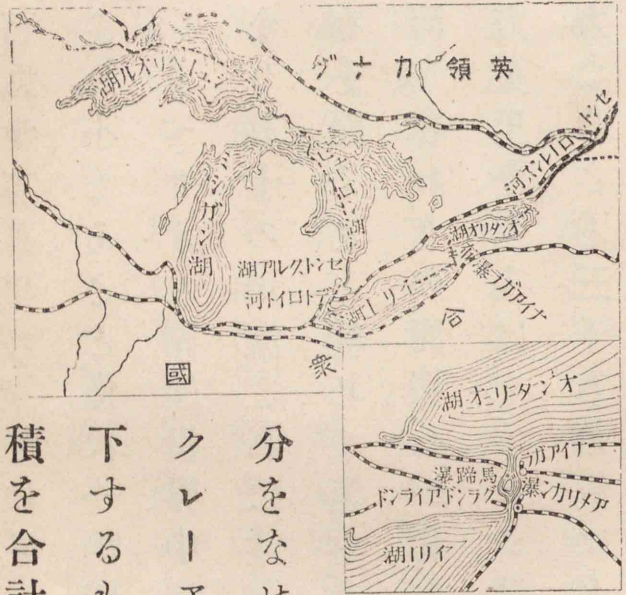
二二、 ナイアガラの瀑

ナイアガラの瀑は、世界中の、最も大なる瀑布にし
て、雄偉、壯快、遙に、人の意表に出で、白虹、飛龍の比喻も、
その眞景の萬分一を形容すること能はざるなり。故

雄偉
意表

膾炙

面積
概算



に、歐亞の文士、詩人、續々、筆を、こゝに曳けども、皆、筆を
抛ち、稿を裂きて、いまだ、嘗て、人口に膾炙すべき佳句、
妙文を寫し、いだしたる
者なしとぞ。

この瀑布は、合衆國と
北米英領との疆界の一
分をなせる五大湖の四と、セント
クレア湖との水の流れ來て、注
下するものにして、その五湖の面
積を合計すれば、概算八萬五千九

容る

百六十方英里の廣さに達せり。我が日本本嶋の面積より小なること、僅に一萬四千方英里なるのみ。そのシューペリオル湖は、世界中、淡水湖の最も大なるものなり。五十の川流、これに注ぎ、位置、最も西に在りて、瀑布を距ること、極めて遠し。次はミシガン湖、無数の小河を容れ、その面積、わが北海道より大なること一千方英里なり。次は、ヒーロン湖、その面積、わが九州より大なること三千方英里にして、湖中の嶋嶼、その數、實に、三萬二千あり。次は、セントクレア湖なり。これは、上の三湖に比ぶれば、極めて小にして、面積、僅に三百

六十方英里に過ぎざれど、おもしろき嶋嶼おほく、名ある河川の、これに注ぐもの、數を知らず。この水下りて、イリー湖となる。その面積、わが四國より大なること二千方英里なり。デトロイト河、これに注ぐ。この湖の東端、ナイアガラ邑の近傍に至りて、グランド、アイランドと稱ふる一嶋に遮られ、分れて、兩派となる。瀑布に近づく前は、河幅せまく、地勢傾きて、流も急なるが、忽ち、地勢の、甚しき高低にあひて、直下するもの、これ、この瀑布なり。瀑布より下、十四英里にして、五大湖の一なるオンタリオ湖に入り、終に出でて、セントロ

彎曲

ーレンスとなり、大西洋に注ぐ。

さて、瀑布の左にあるものは彎曲して、その狀、馬蹄に似たれば、馬蹄瀑の名あり。右にあるものは、アメリカン瀑といふ。蓋し、その、合衆國の境内にあるが爲ならん。左瀑は、幅二百碼にして、高さ百六十呎、右瀑も、幅はおなじくして、高さは百六十四呎なり。算家の言によれば、兩瀑注下の水量、一分時間に、一億噸のおほきに至るとかや。故に、その響、萬雷の吼ゆるがごとく、大地も、これがために震動し、近傍數百歩の地にある家屋にては、盤水、常に、波紋を生ずといふ。

萬雷吼ゆ

波紋

朦朧

飛橋

余が、こゝに遊べるは六月の下旬なり。氷柱の相集りて、玉山、銀臺を造るが如き絶景を見る能はざれども、晝は、飛沫の中に、虹霓の、七彩を現すを見、夜は、圓月の朦朧として、瀑上にのぼるを見たり。ことに、余が宿れる絶景館は、馬蹄瀑の近傍にして、兩瀑の全景を專にせり。一たび、樓上の硝窓を開けば、飛沫、忽ち、衣を濕し、涼氣、膚を侵して、更に、時季の夏なるを覺えず。兩岸、絶景の地には、邑民、あるは、飛橋を架し、あるは、螺階を設けて、人々の眺望に供へたり。余も、また、この螺階を下りて、斷岸の底にいたり、仰ぎて、大瀑の注下するを

見たるに、足慄ひ、魂駭きて、心に感ずる所あれども、口、これをいふこと能はず。かの漢土にて、詩仙といはれし李太白をして、この瀑布を望ましめば、疑是銀河落九天（この句は、廬山に發せずして、必や、こゝに發せしならん。）（小幡篤次郎）

二三、車窓偶感

余、先年、歐洲漫遊を終へて、米國に航し、紐育、フィラデルフィア、華盛頓を通觀し、ナイアガラ瀑布を觀、シカゴを経て、カナダの廣原を横ぎりしことあり。この廣

轆々たり

原は、頗る、山水の眺に乏しきところにして、あけても、くれても、たゞ、茫々たる原野の中を、轆々たる車の響にまかするのみ。されば、余は、ひたすら、この地の民俗を觀察するを以て、その日ごとの務となし、途中、しばしば下車して、そのあたりの僻村に、足を入れ、そのさまざまなる風俗を觀、以て、わづかに、長途の旅情を慰めたりき。

汽車の、セント、ポールといふ地より、支線に進み入りたる時のことなりけり。車中は、乗客、極めて少く、寢臺附の一室には、余と、余の同行者なる某海軍中佐と

を外にして、米國の紳士二人を乗せたるのみなり。されば、われらと、その紳士たちとは、一二日の後、おのづから親しくなりて、互に、姓名を名のりて、さまざまの物語にうち興ずるやうになれり。聞けば、その紳士の一人は、紐育の豪商にて、このたび、ロッキー山の麓に、一の新鑛山を發見したれば、それを調査せんがために、おのが會社の技師なる、他の一人の紳士を伴ひて行くなりとか。さて、われらは、その紳士の贈りくれたる、うつくしき桃の實を割きて、かつ味ひ、かつ談じつゝ、ありしが、余は、何心なく、その桃の核を、足下なる唾壺

調査

の中に投げ棄てつ。その時、豪商は、つと立ち上りて、その核をば、唾壺の中より取り出して、これを、意外に擲ちたり。かくて、あやしみて見つめたる余を顧みて、徐にいふやう、乞ふ君、しばらく、余の言を聞け。見らるゝ如く、わが米國は、なほ、幼兒の時期にあり。これを生長せしめ、これを發達せしめ、以て、完全の壯丁たらしめ、よく、歐洲の文明に對抗せしめんには、われらは、實に、多大の苦心と勞力とをつまざるべからず。されば、われらは、そこに、君等外國人の、同情ある救助を乞はざるべからざるなり。われ、今、君の棄てたる一桃核を拾

慚愧

ひて、この茫々たるカナダの大野に擲てり。おもふに、君は、僕の所爲を解せざらん。君は、年をほ壯なり。後年、君がふたゝび、この地を過ぎん折あらん。その折よ、君もし、この桃核よりして、こゝに、一株の桃樹の、綠葉、葉、葉として、蔭をなせるを見ば、そもや、いかなる快感にうたるべきぞ。あゝ、われらは、君によりて、こゝに、一果樹を與へられたるなり。願くは、君と、再會を、その他日の桃樹の下に期せん」と。余は、この言を聞いて、實に、いふべからざる慚愧の念にうたるとともに、また、米人の心の、いかにもゆかしく、その公德の念の、いかにも

奮闘

したはしきをおもうて、そゞろに、欽仰の情を禁むること能はざりき。(大橋又次郎—歐米小觀による)

二四、奮闘

奮闘セザレバ勝利ナシ。(シオペンハウニル)

境遇カ、ワレ境遇ヲ作ル。(ナボレオン)

生命ノ存スル間ハ、ソコニ望アリ。(キケロ)

河深ケレバ、流靜ナリ。(シエクスピア)

吠ユル犬ハ眠レル獅子ヨリモ、遙ニ有用ナルコトアリ。(アービング)

數多ノ朋友ヲ有スル者ハ、一ノ朋友ヲ有セザル者ナリ。(アリストテレス)

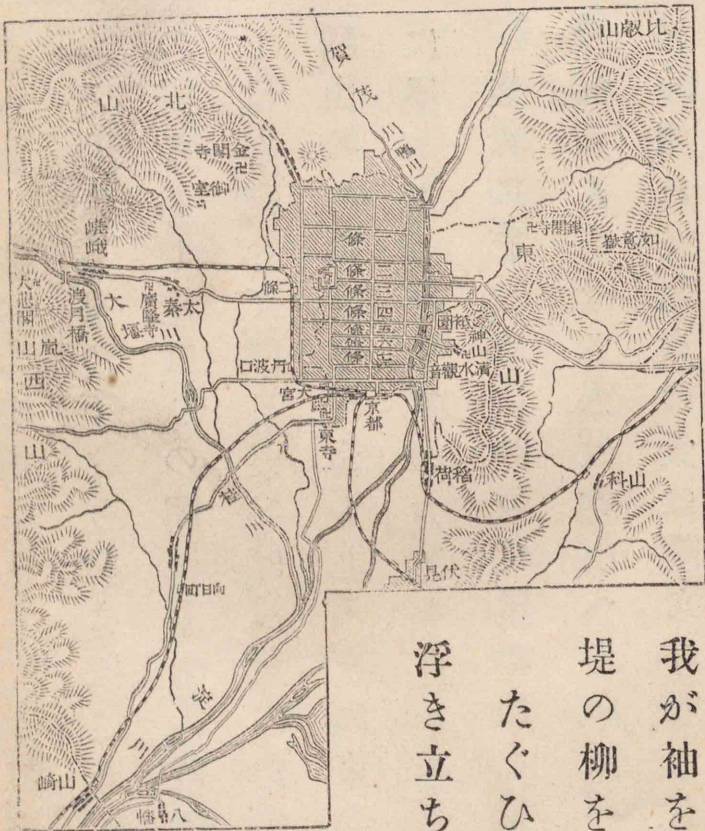
二五、山紫水明

東寺の塔は、睦しく、我を迎へて立ち、鴨川の水は、なつかしく、我を迎へて歌ふ。最愛の母に逢ふに似たるは、いつも、京都に著きたる時の心地なり。

山紫に、水明なるところ、唯、夢の如く、現の如く、三條を渡り、四條を渡ること、日に幾たびぞ。躑躅を、柴に折り添へて、いたゞきつれたる大原女も、いつしか、我が

夢、現

浮き立つ



友となれるが如し。如意嶽より吹きくる春風は、軽く

我が袖を拂ひ、又、絲長き堤の柳を吹く。

たぐひなき、晴天に、心

浮き立ちて、人は、西へ東

へと群れ行く。

花にさそはれ

て、佛に詣りて、

佛に導かれて、

花を看る客、け

墨がき

ふも、清水觀音の堂前をみたしぬ。舞臺のうへより見
おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも、一幅
の畫の如し。姥は、この間に立ちて、「蕨餅召せ」など呼ぶ。
しばし憩ひて、眺め渡せば、淺黄に、藍に、霞み渡れる八
幡、山崎のあたりもおもしろきに、東寺の塔を、松の間
に墨がきなせる、筆の力こそたくみなれ。

燈火の影は、水に映りて、星の如く花の如し。祇園の
夜櫻看んとする人は、神山へと向ふ。一もとの老木は、
枝を垂れて、篝火の炎に護られ、寒からぬ雪は、雲なき
空よりこぼれて、顔を撲つ。田樂を賣る聲、茶を勧むる

山彦を反す

聲、この花の前後に、山彦を反し來れり。

爲(聲)

西山の花みる人は、多く、まづ、御室を指す。松青く、樓
門赤く、茶煙、絶え絶えに颯りて、花、きはめて白し。塔は、
霞を洩れて、松風の外に聳え、鐘樓は、昔を説きて、香雲
の中につゝまる。誦經の聲、遠く響きて、鶯の歌、とこし
なへに、高き梢にあり。

関なり

かさなる岩根を踏みしめて立つ松、その間を點綴
して咲きほこる花、嵐山の春こそ、今関なれ。小舟に乗
りて、漕ぎゆく人あり、岸のこなたにて、眺むる人あり
一すぢの渡月橋は、錦の如き袂を載せて、この大井川

を横ぎり行かしまむ。阪を登りて、大悲閣に至れば、眼下に廣げらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、恰も西陣を織りいだせる如く、又、友禪を染めなせる如し。

途に、太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽、靜に、鐘樓の瓦を染めて、春もの寂し。茶店あれども客來らず。老嫗は、落花を、風に任せて睡り、兒童は、仁王尊に、紙礫を打ち著けて去る。

暮色は、東山を籠め、叡山をめぐり、やうやう、鴨川に襲ひ來れり。人影黒く、燈影淡く、天地、たゞ平和にして、四顧、たゞ寂寞たり。かへりみれば、西山もなく、また、北

四顧

山もあらず。(大和田建樹「雪月花」による)

二六、高山彦九郎

體(躰、体)

高山彦九郎は、上野新田の人なり。余が二十ばかりの時、來りて一宿せり。この人、鼻高く、目深く、口廣く、體高くして、總髪なり。常に、勤王の志あつく、歴代天皇の御諱、及び、山陵の如き、諳記して、一も誤らず。談、たまたま、王室の衰へしことに至れば、かならず流涕せり。六十餘國を遊觀せんと、四方をうちめぐりしが、その間の奇事、異行、少からず。

王室

學制

ある時、備前の閑谷の學校に宿りて、その學制規約などを尋ねしに、教授の人、書物一冊を出して示したり。翌朝、早く、その寢室に行きて見れば、彦九郎は、明るも知らず、燈に對して、その書を寫し居たり。猶半枚ばかり残れるを、やがて寫し終へしが、すべて、五十葉ばかりの寫本なりきとなん。

相識

それより、播磨に赴き、姫路の北郊なる相識の人の家に宿れり。あくる日の夕つ方、暇を乞ひて、出でんとするを、主人とよめて、「時は節季なり、日は暮れかゝれり。明朝立たれよ」といひしに、「これより、但馬に行き、年

節季

内侍所

内に、京に出でて、内侍所の御神樂を拜聞せんと思へり。日數限あれば」とて、強ひて出で立ちぬ。



さて、その翌春、かの北郊の百姓の、罪ありて、獄に下されしものが、赦されて歸り來れり。その者、獄中の事を語りし中に、「同じ獄に、一

人の山賊あり。種々の話の末に、「山賊をなして、深山に夜を明したらんには、おそろしき獸などにもあひ、又、天狗などいふ者をも見しならん」と問ひしに、賊の曰

く、十餘年、山に棲みしかど、別に、おそろしきものとは見ざりしが、唯一度、これありき。去年某月某夜、某の山中に、彳みて、人を待ちしに、大なる男一人出て來るを見て、われら四人立ち塞りて、酒錢を乞ひしに、その人、大音にて、「慮外者め」と叱りて、傍に、人なきが如く、しづしづとして過ぎ行きしが、その聲の大きさ、その眼の鋭さ、これこそ、天狗などいふ者にもありつらめ」とぞいひしといふ。この事を、かの主人聞きて、月日を數へて、「その時刻と、その土地とを考ふるに、その人は、必ず彦九郎ならん。かの山中を、節季の夜半に、一人過ぐ

舌を捲く

る人、外には、よもあらじ」とて、舌を捲きたりとぞ。

一揆

また、彦九郎、江戸にありし時、新田のあたりに、百姓一揆起りぬ。かくと聞くや、取るものも取りあへず、路程、二十里あまり、夜道を厭はず馳せ著きしが、一揆は、既にをさまりしかば、その夜、また、直に、江戸に還れりとか。頼萬四郎、その頃、江戸にありて、詳しく、その事を知りて、「この輩、亂世にあらば、一方に向ひて、必ず、大功を立つべし」と、時々語りて、歎稱せり。

歎稱

さて、その地に、偉人あれば、村吏などの惡むこと、いづ方も同じことなるが、彦九郎が郷里は、ある旗本の

不審

虚日

有司

領地なり。その名主、年寄などいふ者、いかにいひいれ
 しか、ある時、領主の邸へ呼ばれ、百姓にて、平生、長き大
 小を横へ家業を務めず、書物のみ讀むは、不審の者と
 て、數月の閒、門側の一室におし籠められしが、懇意の
 朋友の、酒肴を攜へて訪ひ來るもの、虚日なし。ある日、
 大府の一有司の邸に召されて、その方、何故に、諸國を
 遊行し、名ある人を尋ね行くか、仔細ぞあらん、一々申
 し上げよ」といはれければ、彦九郎、亂世には、武者修行
 といふ事の候ふよし承り候ふ。今、太平の御世に候へ
 ば、諸國に、名ある人を搜し求めて、よき事を聽かんと

名告る

するにて候ふ。そのよき事と申すも、忠孝の事より外
 にては候はず」と申しければ、さらば、この書を講釋せ
 よ」と、論語を一巻いだされけるに、彦九郎、いさゝかも
 臆せず、辯舌あざやかに、講說しけり。かくて、數日の後、
 又、かの有司の邸に召されて、講釋せしめられしが、そ
 のをりには、次の閒に、人ありて、その説を書き留めた
 りといふ。その後、又、數日ありて、召しいだされて、名字
 を名告り、大小を帶し、諸國を遊行する事苦しからざ
 る旨達せられけり。
 それより、年を経て、薩摩に遊びしが、歸途、久留米の

當途
便なし

某が家に宿りて、腹切りて失せぬ。人、その故を知らず。或人の話に、「村吏の誣ひし事も、何の咎もなく免されしは、某侯の當途の時なりき。その後、某侯、職を辭し給ひければ、その身も、便なき事に思ひて、失せにけるにや」といふ。されど、そは、命を棄つべきほどの事にもあらざれば、他に、なにか、深き仔細のありし事ならん。猶、この人の事に就き、聞き及びし事もあれど、今はしるさず。(菅茶山一筆のすさび)

二七、 蘇武 (坪内雄藏)

颯々

風颯々のあきふけて、
日をかさねたる旅衣、
おもき君命いたゞきて、
遠く匈奴の國に入る。
野邊の草木や鳥のこゑ、
聞く物の音も見る色も、
いづれか夷のものならぬ。
思へば遠く來つるかな。
ながれゆく水音たてて、
胸にうれへの波高し。

草枕

故郷母あり雁鳴きて、
老の寢覺やいかならん。

よしや幾夜の草枕、

旅寢の空にむすぶとも、

國家のために盡すべし。

君命おもく身は輕し。

かうと覺悟は定りぬ。

使命つぶさに傳へつゝ、

匈奴の王に面接し、

蘇武は國書を呈しけり。

國家

使命

面接

非道

もとより非道の王なれば、

國書の旨意は聽かざれど、

單身敵地につかひせし、

蘇武が勇氣ををしみつゝ、

ある時蘇武を召しよせて、

「降り仕へよしかあらば、

おもく汝を用ゐん」と、

説き諭せども可かざれば、

國王おほいに怒をなし、

蘇武をとらへて荒山の、

幽閉

いはやの中に幽閉し、
 食を與へずくるしめぬ。
 頃しも北風雪を吹き、
 寒さ膚をつんざきぬ。
 飢うれば枯草を雪に和し、
 いのちを繋ぐ料となす。
 日數ふれども死せざれば
 えびすら怪み且怖れ、
 こたびは蘇武を野に移し、
 羊の群をまもらせて、

放免

最中

「雄羊はらむことあらば、
 放免せん」とあざけりぬ。
 覺悟はしても無念さに、
 眠られぬ夜も幾度か。
 一夜雲なく月すみて、
 秋も最中の空の色、
 せめてはかくて在ることをと、
 雁に託せし筆のあと。
 かくて春去り夏きたり、
 また秋の風冬の霜、

忠節

落葉落葉のかさなりて、
十有九年ゆめの閒や。

老いて屈せぬ忠節を、

天助けてか不思議にも、

雁の使

雁の使のかひありて、

樂しきたよりぞ聞えける。

國と國との和議成りて、

蘇武は赦され歸りしが、

立ちいでし時の黒髪は、

いつしか雪とぞなれりける。』

陋なり

二八、わが家の富

家は、十坪に過ぎず、庭は、たゞ三坪。誰かいふ、狭くして、且陋なりと。家陋なりと雖も、膝を容るべく、庭狭しと雖も、碧空仰ぐべし。

観ず

神の月日は、此處にも照れば、四季も來り見舞ひ、風雨、雪霰、かはるがはる到りて、興淺からず。蝶兒舞ひ、蟬子鳴き、小鳥遊び、秋蛩、また吟ず。靜に觀ずれば、この世の富は、殆ど、三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。

庭に、一株の老李あり。春四月の頃となれば、青白き

舞々
紛々

亭々

花開いて、樹に満つ。風ある日には、青々と霞める空より、白き花、ちらちらと舞ひて、一庭、須臾に、雪を散す。鄰家に、花樹多し。風に隨ひて、飛花、わが庭に墜ち、紅雨霏々、白雪紛々たり。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。庭隅に、一株の山梔子あり。臯月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も、妻も無口なれば、この花の、わが家に開くは宜なりけり。

老李の背後に、一株の碧梧あり。その幹、亭々として聳え、わが如く直かれと教ふるに似たり。手水鉢の側

なる金剛纂と共に、その葉廣うして、わが家の雨聲を多からしむ。

つくつくぼうしの聲に、世は、何時か、秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も、紅に燃え出で、唯一株、前の家主の植ゑ遺したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ、寂びたる趣は、却って、わが庭の一枝にあるべし。

屋後に、一株の公孫樹あり。秋深くして、滿樹、金よりも黄なり。木枯の風起れば、扇のごときその葉、翩々として翻り落つ。半夜、夢覺めて、雨かと疑ひ、曉に起きて、

名苑

寂びたり

翩々

戸を開けば、庭は、一夜に、金色となりぬ。屋根も、庇も、手
 水鉢も、處として、落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち
 添ひて、寸金と、人はいふなる錦を、われは、庭に敷き詰
 めぬ。

木の葉落ち盡しては、流石に寂しげなれども、日影、
 月影、いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに、障すく
 なきは嬉し。(徳富健次郎—自然と人生)

新訂中等國語讀本卷四 終

明治三十九年二月二十六日 再訂第二版印刷
 明治四十年十一月十四日 再訂改版印刷
 明治四十一年一月二十五日 新訂再版印刷
 明治四十二年一月二十八日 新訂再版發行

新訂中等國語讀本
 全十册
 定價 各金貳拾五錢



著者 故落合直文
 相續者 落合直幸
 補修者 文學博士 萩野由之
 補修者 醫學博士 森林太郎
 發行兼印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地 三樹一平

發行所
 販賣所

東京市神田區錦町一丁目
 [長電話本局二四三八番]
 東京市神田區南乗物町
 [長電話本局八九二番]
 [電話本局一六四番]

明治圖書院
 明治圖書株式會社
 [振替貯金口座東京四九二番]
 [振替貯金口座東京四九二番]

